

漱石の執筆制限と『ホトトギス』——虚子との交流を通して——

文学研究科国文学専攻博士後期課程2年 根本 文子

はじめに

明治三八年一月一日発行の『ホトトギス』第八巻第四号には、漱石の小説「吾輩は猫である」の第一回が掲載され、巻末に附録として、子規の壮絶な闘病記録「仰臥漫録」が掲載されている。それは『ホトトギス』編集発行人の虚子の苦悩も含め、ともに明治の新しい時代を自ら切り開こうとする三人の渾身の思いと立場を伝えるものである。

なかでも夏目漱石は「吾輩は猫である」が空前の人気を博した事を出発点として、小説家として成功してゆく。これを目の当たりして、もともと小説家を強く志向していた虚子は自らも小説を書く傍ら『ホトトギス』の文芸誌への転換を強力に押し進める。しかしやがて『ホトトギス』の発行部数減少を招くことになる。そこで虚子は、俳壇を席卷していた碧梧桐の新傾向俳句への対抗、俳壇復帰を

強く望む中川四明や、俳句誌としての購読を望む読者の強力な要請に応えるかたちで、再び俳壇に復帰する。この俳壇復帰の要因となる『ホトトギス』衰退の一因に、漱石の朝日新聞入社による執筆制限があるとされてきた。その根拠は、例えば虚子の次の様な記述にあると思われる。

私が国民新聞社に入社して国民文学といふ仕事に携はり、「ホトトギス」には益々俳句のことが少なくなり、又漱石は朝日新聞に入社して、他のものには筆を取らぬことになり、従つて「ホトトギス」にも執筆しないことになりましたので、「ホトトギス」の読者が非常に激減しまして、維持が困難になつてきたといふ事の為に、(略)遂に国民新聞社を退く事に決心しました。

(高浜虚子「国民新聞を退く」

『俳句の五十年』昭17・12 中央公論社)

漱石と虚子の関係を伝える発言としては、何れも虚子の著作である『漱石氏と私』（大7・1 書店 アルス）、「猫」の頃（『漱石全集』昭和三年版月報第一号 岩波書店）、「漱石と私」（『俳句の五十年』）等がある。そして、当然ではあるが長命であった虚子には、その執筆年代によって微妙なニュアンスの違いが見てとれる。

一方漱石側には特に虚子を特定してその交流をまとめたものは見当たらない。漱石は、明治四〇年、四一歳で朝日新聞社に入社して小説家に転身し、大正五年、五〇歳で没するまで、後世に残る数々の名作を残したが、虚子のように、自らの人生を回顧する十分な時間を持ち得なかった。

本稿は数少ない漱石側の言及の中から、主として漱石の書簡に注目する。そして、虚子に宛てたもの、朝日新聞入社に関わった、坂元雪鳥に宛てたもの等を点検し、虚子の俳壇復帰の要因となる『ホトトギス』衰退の原因が、漱石にあるとする通説に疑問を呈するものである。なお、引用する漱石書簡の末尾に示した数字は『漱石全集』の書簡篇（上・中・下）の通し番号である。

一 『吾輩は猫である』と文章熱の勃興

明治三十六年一月、イギリス留学から帰国した漱石は、東京帝国大学、及び第一高等学校の教師となる。そして二年後の明治三十八年一月、虚子の編輯する俳誌『ホトトギス』新年号に「吾輩は猫である」

を発表し、小説家として知られるようになる。

当時の様子を虚子は「漱石と私」・「我輩は猫である」（『俳句の五十年』）で次の様に記している。

漱石が、本郷の彌生町に住まつてをつた頃の事ではありますが、私はよくその家を訪ねたものでした。（略）元来、天才的の人であつたものですからして、普通の人が考へるやうな風に萬事が行かなくなつて、いくらか神経衰弱にかゝつた人が考へるやうな、軌道に乗らない考へ方もあつた事と考へられます。そこで細君が漱石の言行に手古摺つて、暇があつたならば漱石を少し連れ出して何處かに行つて、気保養をさしてくれないかといふやうな事を私に頼んだ事もあつたのであります（略）。

「山會」と稱へた文章會は、子規の生前の時分から致してをつたのでありましたが、子規歿後もやはりそれを續けてやつてをりました。（『漱石と私』『俳句の五十年』）

ある時私は漱石が文章でも書いてみたならば気が紛れるだらうと思ひまして、文章を書いて見る事を勧めました。（略）その日になつて立寄つてみますと、非常に長い文章が出来ておりました、頗る機嫌が良く、（略）讀んでみてくれるといふ話でありませんでした。（略）漱石の家で讀んだ時分に、題はまだ定めてありませんでした、「猫傳」としようかといふ話があつたので

ありますが、「猫傳」といふよりも（略）、冒頭の一句をそのま、
 標題にして「我輩は猫である」といふ事にしたらどうかとい
 と、漱石は、それでも結構だ、名前はどうでもいい、からして、
 私に勝手につけてくれる、という話でありました。

（「我輩は猫である」『俳句の五十年』）

こうして、有名な「吾輩は猫である」の題が決まった。その後、
 虚子が推敲して「二、三ヶ所削り」（「我輩は猫である」『俳句の五十
 年』）、活版所に廻して一月号の『ホトトギス』に発表した。すると
 「大変な反響を起しまして、非常な評判となりました」（同）という
 状況になる。これは虚子が「文章でも書いてみたならば」（同）と、
 漱石に勧めた何気ない一言から、小説家夏目漱石誕生への重要な契
 機が生じたことになる。

では、漱石は「吾輩は猫である」を執筆した明治三八年当時のこ
 とを、どう思っていたのだろうか。三九歳で「吾輩は猫である」を
 書いてから全速力で休む間もなく書き続け、五〇歳で没した漱石に
 は、自らの人生を回顧する十分な時間と心の余裕がなかったと思わ
 れる。したがって『文章世界』に掲載した評論、「時機が来てゐた
 んだ」は貴重な言及の一つである。

私の處女作……と言へば先ず『猫』だらうが、別に追懐する
 程のこともないやうだ。たゞ偶然あゝいふものが出来たので、
 私がさういふ時機に達して居たといふまでである。

といふのが、もと／＼私には何をしなければならぬといふこ
 とがなかつた。勿論生きて居るから何かしなければならぬ。す
 る以上は自己の存在を確實にし、此處に個人があるといふこと
 を他にも知らせねばならぬ位の了見は常人と同じ様に持つてゐ
 たかも知れぬ。けれども創作の方面で自己を發揮しやうとは、
 創作をやる前迄も別段考へてゐなかつた。（略）

さて正岡子規君とは元からの友人であつたので、私が倫敦に
 居る時正岡に下宿で閉口した模様を手紙にかいて送ると、正岡
 はそれを「ホト、ギス」に載せた。「ホト、ギス」とは元から
 関係があつたが、それが近因で私が日本に歸つた時（正岡はも
 う死んで居た）編輯者の虚子から何か書いて呉れないかと囁ま
 れたので始めて「我輩は猫である」といふのを書いた。所が虚
 子がそれを讀んで、これは不可^{いけ}ませんと云ふ。譯を聞いて見る
 と段々ある。今は丸で忘れて仕舞つたが、兎に角尤もだと思つ
 て書き直した。

今度は虚子が大いに賞めてそれを「ホト、ギス」に載せたが、
 實はそれ一回きりのつもりだつたのだ。ところが虚子が面白い
 から續きを書けといふので、だん／＼書いて居るうちにあんな
 に長くなつて了つた。といふような譯だから、私はたゞ偶然そ

んなものを書いたといふだけで、別に當時の文壇に対してどうかうといふ考も何もなかつた。たゞ書きたいから書き、作りた^イいから作つたま^イで、つまり言へば私があゝいふ時機に達して居たのである。もつとも書き初めた時と、終る時分とは餘程考が違つて居た。文體なども人を真似るのがいやだつたからあんな風にやつて見たに過ぎない。

何しろそんな風で今日迄やつて来たのだが、以上を綜合して考へると私は何事に對しても積極的でないから考へて自分でも驚ろいた。文科に入つたのも友人のすゝめだし、教師になつたのも人がさう言つて呉れたからだし、洋行したのも、歸つて來て大學に勤めたのも、「朝日新聞」に入つたのも、小説を書いたのも皆さうだ。だから私といふ者は、一方から言へば他が造つて呉れたやうなものである。(夏目漱石「時機が来てゐたんだ」(処女作追懷談)『文章世界』第三卷第十二号 明41・9 博文館)

これを書いた明治四一年の漱石は、「吾輩は猫である」の明治三八年からまだ三年余の時期にあたるが、『文章世界』の「処女作追懷談」に應じてそれまでを振り返り、「私といふ者は、一方から言へば他が造つて呉れたやうなものである」と率直に、そして謙虚に語っている。この漱石の文章の「他」とは誰かを具体的に示すと、次のようになる。

- A 「文科に入つたのも友人のすゝめだし」(米山保三郎¹)
- B 「教師になつたのも人がさう言つて呉れたからだし」(菅虎雄²)
- C 「洋行したのも」(中川元校長³)
- D 「歸つて來て大學に勤めたのも」(狩野亨吉⁴、菅虎雄²、大塚保治⁵)
- E 「朝日新聞に入つたのも」(鳥居素川⁶、池邊三山⁷)
- F 「小説を書いたのも」(高浜虚子)

人生の転機のそれぞれに、周囲の人々の導きがあつたことを感謝しながらも、その恩恵を経たのち、処女作『猫』を書いたのは、「私」がさういふ時機に達して居た」と強く実感していたことがわかる。なかでも「正岡子規君とは元からの友人であつたので」、深く思いを致すところがあつたのではないだろうか。なぜなら、漱石の「時機が来てゐたんだ」の文中にある、たゞ書きたいから書き、作りた^イいから作つたま^イでという一節は、子規がロンドンの漱石に書き送つた最後の手紙と重なるからである。そこには、書キタイコトハ多イガ、苦シイカラ許シテクレ玉ヘ、という子規の言葉がある。漱石は「吾輩ハ猫デアル 中編」序」に、この「僕ハモーダメニナツテシマツタ」で始まる子規の手紙のほぼ全文を掲載し、以下のよう

に書いている。

(子規は) にくい男だが、書きたいことは多いが、苦しいか

ら許してくれ玉へ、杯と云はれると気の毒で堪らない。余は子規に對して此の氣の毒を晴らさないうちに、とう／＼彼を殺して仕舞つた。(略) 墨汁一滴のうちで暗に余を激勵した故人に對しては、此作を地下に寄するのが或は恰好かも知れぬ。季子は劍を墓にかけて、故人の意に酬いたと云ふから、余も亦「猫」を碓頭に献じて、往日の氣の毒を五年後の今日に晴らさうと思ふ。(略) 子規は今どこにどうして居るか知らない。恐らくは据ゑるべき尻がないので落付きをとる機械に窮してゐるだらう。余は未だに尻を持つて居る。どうせ持つてゐるものだから、先ずどつしりと、おろして、さう人の思はく通り急には動かない積りである。

(夏目漱石「吾輩ハ猫デアル 中編」序(明39・11 大倉・服部書店)

(注 季子…呉の季子が、徐君の墓に自らの劍を掛けて、生前にその劍を欲していた故人に報いたという、『史記』にある故事)。

漱石は「さういふ時機に達した」いま、返事を書かなかつた子規の手紙に向き合い、書キタイコトハ多イガ、苦シイカラ許シテクレ玉へ、と言う他はなかつた子規の無念に、今更のごとく想い到る。当時の漱石の心境を山崎甲一氏は、漱石の句「どつしりと尻を据ゑたる南瓜かな」(『漱石全集』第一七卷)を挙げて次の様に解説する。

子規に応え得る創作という仕事の備わりが、死後であつたという、動かしようのない事実¹に他ならぬ。この尻の座りが身に備わつた時に初めて、「故人の意」の在り所を、そして、亡き子規が自分に促す「約束の履行」の内容を創り出すことに成るのである。

「生キテキルノガ苦シイノダ」と言いつつ、なお、子規の「筆力は垂死の病人とは思へぬ程確かである」と漱石が記すとき、見ていたものは、文字に自己を託す者の底知れぬ凄まじさである。『猫』の終焉(中)『鶴見大学紀要第16号』昭54・2)

子規の「書キタイコトハ多イガ苦シイカラ許シテクレ玉へ」という言葉は、「中編序」以降、漱石の心に住みつき、「墨汁一滴」に止まらず、折に触れて漱石を衝き動かす力となるのである。

一方の虚子は思いがけず大好評を得た『猫』の後のことを、次の様に続ける。

それから「我輩は猫である」が、大受好評を博したものですからして、それは一年と八ヶ月続きまして、続々と続編を書く、而もその続編はこの第一篇よりも遙かに長いものを書いて、「ホトトギス」は殆どその「我輩は猫である」の続編で埋まつてしまふといふやうな勢ひになりました。それが為に「ホトトギス」

もぐんぐんと毎号部数が増して行くといふやうな勢ひでありました。
〔我輩は猫である〕『俳句の五十年』

発行部数は多い時で八千にも及んだといわれる（新潮日本文学アルバム『高濱虚子』平6・10）。

ひとりこれが漱石の一身上に重大な変化を来す原因になつたばかりでなく、我々仲間の者も漱石の刺激を受けて、皆一様に文章熱が勃興するといつたやうな有様でありました。

〔文章熱の勃興〕『俳句の五十年』

『ホトトギス』はこの文章熱の勃興で漱石、虚子以外にも、様々な新人作家の小説を掲載し、俳句雑誌から文芸雑誌へと強力に転換を図る。そんな中で漱石は野村伝四宛て書簡で次のように虚子を擁護している。

（虚子は）文章に関しては一隻眼を有して居る。ある方面に癖（癖）して居るかもしれないが彼の云ふ所は理屈も何もつけずして直ちに其根底に突き入る断案を下すに於て到底大学の博士や学士の及ぶ所でない。かゝる人の云ふ事は傾聴すべき価値がある。かゝる人にくさゝれたら其くさゝれた理由を知るのは作家にとつて寧ろ愉快である

（明治三十八年六月二七日 野村伝四宛漱石書簡 440）

漱石は『ホトトギス』に「吾輩は猫である」を十一回に渡り掲載する傍ら、三八年だけでも「倫敦塔」「カーライル博物館」「幻影の盾」「琴のそら音」「一夜」「薙露行」を執筆し、一〇月には『吾輩ハ猫デアル』上編を大倉・服部書店より刊行する。

そうしたなかで虚子に書簡を送り「やめたきは教師、やりたきは創作」と語る。三八年九月頃からすでに、生活が成り立つなら創作一本で暮らしたい、という願望が強まっていたことが解る。

小生は生涯のうちに自分で満足の出来る作品が二三篇でも出来ればあとはどうでもよいと云ふ寡欲な男に候処。それをやるには牛肉も食はなければならず玉子も飲まなければならずと云ふ始末からして遂々心にもなき商売に本性を忘れるといふ顛末に立ち至り候。何とも残念の至りに候。（とは滑稽ですかね）とにかくやめたきは教師、やりたきは創作。創作さえ出来れば夫丈で天に対しても人に対しても義理は立つと存候。自己に対しては無論の事に候。

（明治三十八年九月一七日 虚子宛漱石書簡 466）

翌三九年（1906）四月から『ホトトギス』に「坊っちゃん」の掲載を始めるが、一月には虚子に、『ホトトギス』の奮起を促す

書簡を送っている。

僕つらく思ふにホト、ギスは今の様に毎号版で押した様な事を十年一日の如くつゞけて行つては立ち行かないと思ふ。俳句に文章にもつと英気を鼓舞して刷新をしなければいけないですよ。と申して別に名案もないから只主人公たる君が大奮発をするより外に仕方がない。文庫新声杯一時景気の良いものが皆駄目になるのは時候遅れだからだと思ひます。ホト、ギスも売れるうちに色々考へて置かぬとならんでせう。

先づ巻頭に毎号世人の注意をひくに足る作物を一つ宛のせる事が肝心ですね。夫から君は毎号俳話をかいて、四方太は文話でもかいたらどうです(略)。とにかくもつと活気をつけたいですね。小生余計な世話を焼いて失敬だがホト、ギスが三四千出るのは寧ろ異数の観がある。決して常態ではない油断をしては困る事になると思ひます。

そんなら僕に何かかけと来るかも知れんが僕は取りのけ別問題です。一寸手紙をかく序があるから是を差し上げます。苦い顔をしてはいけません 頓首

(明治三十九年一月二六日 虚子宛漱石書簡 527)

漱石はすでに、『猫』が終了しないこの段階で、十年一日の如き『ホトトギス』の行く末を心配し、「油断をしては困る事になると思ひ

ます」と忠告する。そして『猫』の好評で売れ行きを伸ばしている今のうちに、時候遅れにならないように刷新する事。そのためには「巻頭に世人の注意をひくに足る作物を一つ宛のせる事」、虚子自身には「毎号俳話を書く」ことなど、まるで『ホトトギス』の将来と虚子の俳句の才能を見抜いてでもいるかのような助言である。そして次の書簡では、値上げした『ホトトギス』の売れ行きを心配する。

拝啓雑誌五十二銭とは驚いた。今迄雑誌で五十二銭のはありませんね。夫で五千五百部売れたら日本の経済も大分進歩したものと見て是から五十二銭を出したらよからうと思ひます。其の代りうれなかつたら是にこりて定価を御下げなさい。中央公論は六千刷つたさうだ。ほととぎすの五千五百は少ないといふて居ました。来月もかけとは恐れ入りましたね。さうは命がつかない。来月は君の独舞台で目ざましい奴を出し給へ

(明治三十九年四月一日 虚子宛漱石書簡 552)

虚子の強い小説志向を知る漱石は、虚子と『ホトトギス』が漱石の作品に依存せず、自らの努力と作品で自立する事を強く促しているのではないだろうか。

そうした中で九月には虚子の招待で、一高講師モリスを交え靖国神社能楽堂の能に出かけて和やかな時間も過ごしている。

二 漱石資料にみる『ホトトギス』執筆制限のこと

明治四〇年（1907）漱石は四一歳となる。

『ホトトギス』新年号に「野分」が、「国民新聞」に「漱石氏の写生文論」が掲載される。また、一月、春陽堂書店より『鶉籠』が刊行された。これを朝日新聞大阪本社にいた鳥居素川が読んだことで、漱石に転機が訪れる。すなわち朝日新聞への入社打診である。素川は「漱石君を悼む」で次のように回想する。

自分は夏目君を東大より我社に奪つた発頭人として感慨殊に深いのである。夏目君は文学の大家であることは疾く何人も知つて居ただろうが、自分は知らなかつた。

（略）殊に自分は小説嫌ひである。読まず嫌ひである。小説なるものは男女の關係を書いたもので、士君子の手にすべきでない。書く者の人物は勿論、之を読む者も卑しむべしといふ断から、所謂小説といふものを読まなかつた。（鳥居素川「漱石君を悼む」〔大正五年十二月十一日大阪朝日新聞掲載・『漱石全集』昭和三年版月報第十一号〕

新聞記者という、時代の最前線にいて、尤も進歩的であろうはずの立場の人物が、当時の「小説」に対する認識がこのようなもので

あつたことに改めて驚かされる。作家という職業の、社会的地位の低さに今昔の感がある。その素川が、評判の『猫』を読んでも何の感興も得なかつたにも関わらず、たまたま勤務に疲れた春の夕方、漱石の著作を今一度読んでみようと思ひ立つ。素川は『鶉籠』を袖にして草原に寝転んだ。そしてその中の「草枕」に感動し、漱石獲得に動き出す。素川は村山社長に願ひ出て、東京朝日新聞主筆の池邊三山に相談する。この、たった一人の感動と行動が後の文豪漱石を作り上げる重大な契機となるのである。

こうして二月二日熊本第五高等学校の漱石の教え子、白仁三郎（のち坂元雪鳥）が池邊三山の意を受け、朝日新聞入社打診で漱石宅を訪れる。雪鳥は良好な感觸を得て早々に辞去し、漱石と同じ西方町の二葉亭四迷宅で待つ朝日新聞関係者に報告している。

〔坂元雪鳥「漱石入社前後」について』『漱石全集』昭和十年版月報第二号〕

三月四日、漱石は雪鳥に手紙を書き（雪鳥宛漱石書簡 794）、「御話の義は篤と考へたくと存候」と前向きである事を伝える。主筆の池邊三山の名を知っており「池邊氏と直接御目にかゝり御相談を遂げ度と存候」と希望する。そして大学をやめる事を前提に、手当のこと、執筆条件のこと、身分保障のこと、などを細かく問い合わせる。そして追白として「大學を出て江湖の士となるは今迄誰も

やらぬ事に候夫故、一寸やつて見度候。是も變人たる所以かと存候」と密かに楽しむ気持ちすら垣間見える。

三月七日 雪鳥は漱石の質問書簡に対する、朝日新聞社からの回答を持って漱石宅を訪問。そして翌八日、前日の回答に補足する手紙を書く。

昨日は御邪魔仕奉萬謝候。早速社の方へ参り委細申通じ候処、一同前途の有望なる可きを欣び居り候。彼時差上置候箇条書の内、小説以外の御執筆に就き、尚御相談可仕旨記載有之候は、決して先生に多大の御労力を願ふ意味に無之、却而御都合次第にて分量・度数を減輕す可余地を示したるもの、由申居候。(略)又時勢に関するもの或は文運に関するものなどの御高説は、是を第三面の第一欄(主筆執筆の欄)へ掲げ度き希望の旨、話有之候。社説として従来全く文芸欄無きは、密に編輯局員の遺憾とする処なりし由に候。

(明治四〇年三月八日 坂元雪鳥より漱石宛書簡)

ここで注目されるのは前日に持参した朝日新聞社からの回答を「彼時差上置候箇条書」としていること。また、後に虚子が問題とする朝日新聞の「文芸欄」構想がすでにこのとき、またはそれ以前からあったことが確認されることである。

雪鳥が三月七日に持参した、朝日新聞社からの回答の「箇条書」は、漱石の質問と朝日の回答がよく整理された貴重な資料なので全文を掲載する。出処は小宮豊隆が『漱石全集』昭和十年版月報第一号に、「漱石入社前後」として、解説を添えて掲載したものである。

此所に「彼時差上置箇条書」とある。是は、漱石が参考の為に承知して置きたいと言つて三月四日の手紙の中に、書いた條を、半紙を横に二つに折つて、上段に、恐らく雪鳥が、筆で一一箇条書きに書いて行つたものの下段に、恐らく當時の東京朝日の主筆池邊三山が、ペンで一一答を書いて行つた、その書附けをさすのである。其所にはかうある。

- 1 手当月額如何。並に其額は固定するか或は累進するか。
 - 2 月俸二百圓、累進式ナリ、但し僕の如キ怠ケ者ハ動モスレバ固定シ易キ傾向アリ
 - 3 無暗に免職せぬと云ふ如き保証出来るや。池邊氏或は社主により保証され得べきか。
- ご希望とアラバ正式ニ保証サスベシ
- 3 退隠料或は恩給とでもいふ様なもの、性質如何。並に其額は在職中の手当の凡そ幾割位に當るや。夫等の慣例如何
- 既ニ草案ハアルも未ダ確定ニ至ラズ、併シ早晚社則ガ出来ル

ナラント信ズ、先ズ御役所並位ノ處ト見當ヲ附ケテ居イテ戴
キタシ

4 小説は年に一回にて可なるか。其連続回数は何回位なる可
きか

年二二回、一回百回位ノ大作ヲ希望ス、尤モ回数ヲ短クシテ
三回ニテモ宜敷候

5 作に対して營業部より苦情出ても構わぬか

營業部ヨリ苦情ノ出ル杯イフ事ハ絶對的ニナキコトヲ確保ス

6 自分の作は新聞（現今の）には不向きとおもふ、夫でも差
支無や。又其内今の様に流行せぬ様に漱石の名がなつても
差支無や。

差支ナシ、先生ノ名聲ガ後來朝日新聞ノ流行ト共ニ益世間ニ
流行スベキコトヲ確信シ切望ス

7 小説以外に書く可き事項は、随意の題目として一週に幾回
出す可きか、又其一回の分量は幾何

此事ハ其時々ニ御相談致シタシ。多作ハ希望セズ、又ソノ無
理ナコトハ願ハズ、其時々社モ希望ヲ述べ、先生ノ御希望モ
伺ヒ臨機ニ都合ヨク取極メタシ

8 雑誌には今日の如く執筆の自由を許され可きか

従来御関係ノ深キ『ホトトギス』へハ御執筆御自由ノコト、
其他一二ノ雑誌へ論説御寄稿ハ差支ナシ、但シ小説ハ是非一
切社ニ申受タシ、又他ノ新聞へハ一切御執筆ナカラシコトヲ

希望ス

9 誌上に載せたる一切の作物を纏めて出版する版權を得らる
可きか

差支ナシ

雪鳥は、自分が仲に立つてゐて、双方の意志を曖昧にもしく
は誤つて伝へてはならないといふ心遣ひから、わざわざかうい
ふ文書を作成したものに相違ない。

（小宮豊隆「漱石入社前後」『漱石全集』昭和十年版月報第一号）

漱石は、さきに雪鳥に送った質問書簡（書簡794）に対する、
三月七日の朝日からの回答「彼時差上置箇条書」、および三月八日
の雪鳥からの補足書簡を見て、三月一日、雪鳥に返信する（雪鳥
宛漱石書簡797）。そこには「多忙中未だ熟考せざれども大約左
の如き申出を許可相成候へば進んで池邊氏と会見致し度と存候」と
前置きし、自らの要望の最終確認がなされている。その内容の重要
部分を摘記すると骨子はおよそ次の様である。

一、小生の文學的作物は一切を挙げて朝日新聞に掲載する事
一、その分量と種類と長短と時日の割合は小生の随意たる事
一、もし文學的作物にて他の雑誌に不得已掲載の場合には、其
都度朝日社の許可を得べく候。（是は事實として殆どなき事と

存候。既に御許容のホトトギスと雖ども、入社以後は滅多に執筆はせぬ覚悟に候)

一、但し全く非文学的ならぬもの(誰がみても)或いは二三頁の端もの、もしくは新聞に不向きなる學説の論文等は、無断にて適当な所へ掲載の自由を得度と存候

これらの書面から、漱石が文学的作物の一切を朝日新聞に掲載する事を条件に、報酬の事、地位の安全の事など、注意深く契約を進めていることが解る。『ホトトギス』への執筆については、三月七日の朝日からの回答では「従来御関係ノ深キ『ホトトギス』へハ御執筆御自由ノコト」とあるが、三月一日の書簡(797)では漱石の方から「ホトトギスと雖ども、入社以後は滅多に執筆はせぬ覚悟に候」と申し入れている。そこには「一度大学を出て野の人と成る以上は、再び教師杯にはならぬ」という、漱石の固い覚悟が見えている。

三月一五日 東京朝日新聞主筆池邊三山が、自分の方から漱石を訪ねて来た。漱石はその時の事を、三山の遺著『明治維新三大政治家』再版の序文「池邊君の史論に就いて」(明45・5 新潮社)に、哀悼を込めて書いている。三山にはじめて会い、人間としての信頼感を得たことにより、朝日新聞入社を決意する。

話が着々進行して略纏まる段になつたにはなつたが、何だか不安心な所が何処かに残つてゐた。然るに今日始めて池邊に合つたら其不安心が全く消えた。西郷隆盛に会つたやうな心持ちがする。―ざつと斯んなものであつた。(池邊君の史論に就いて)。

漱石は以上の経過を経て「創作さえ出来れば」という自らの希望を実現する。

しかし虚子と『ホトトギス』に対しては猶気懸かりであつたのだろう。このときすでに虚子から『ホトトギス』の応募小説の選抜と正月号への執筆依頼の打診を受けていたらしい。この件につき、「小生が朝日へ書き得る分量次第かと存候」と事情を伝え、「とも角も出来得る限りホトトギスの為に御用を務める事に致すべく候」(明治四〇年三月二三日虚子宛漱石書簡 804)と、配慮の気持ち滲ませる。

この項の終わりに、もう一度執筆制限を確認すると、まず小説に關しては、「一切朝日新聞社だけとする」ことで双方が了解していると思われる。問題は小説以外の「文学的作物」で、これについて「従来御関係の深き『ホトトギス』へは御執筆御自由のこと」であるが、几帳面な漱石は「既に御許容のホトトギスと雖ども入社以後は滅多に執筆はせぬ覚悟に候」と申し入れる。そのうえで、「それ

以外の非文学的なものの掲載の自由」を入社の条件として希望する。この結果、漱石は虚子の「国民新聞」に多くの寄稿をし、支援していく事になる。

では虚子の方はどう思っていたのか。当時から一〇年以上を経た、大正七年の『漱石氏と私』に、やや複雑な心境を滲ませて次のように書いている。

(漱石氏) は朝日新聞社員となつた以上は新聞の爲に十分の力を盡して職責を空しくしないやうにしなければならぬといふ強い責任感を持つていた。そこで新聞社の方では他の雑誌、少なくとも其出身地であるホトトギスに時々稿を寄せる位の事は差支ない事としてゐたらしかつたが——これは私が澁川玄耳君から聞いた事であつた——漱石氏は他の雑誌に書くときだけ新聞に書くべき物を怠るやうになるといふ理由から新聞以外は一切筆を取らないと定めたやうであつた。これは創作が道楽でなくなつて職業となり原稿用紙に向ふことに興味の念の薄くなつて来た以上止むを得ぬ傾向と言はねばならなかつた。

虚子は、漱石が『ホトトギス』に書かなくなつた理由を、職業作家となつたことで朝日新聞以外に、「原稿用紙に向ふことに興味の念の薄くなつて来た」からとしているが、そうだろうか。三月二三

日の虚子への書簡(前掲804)の「小生が朝日に書き得る分量次第かと存候」が正直な本音であろう。もう一つ考えられる事は、虚子の若い頃からの強い小説家志望を最もよく知る漱石は、虚子が小説家として独り立ちできるチャンスと捉えたのではないだろうか。事実『猫』の成功で、文芸誌に舵を切つた『ホトトギス』からは、伊藤左千夫「野菊の墓」、鈴木三重吉「千鳥」、長塚節「土」(漱石の意向で東京朝日新聞に連載)、野上弥生子「縁」などが誕生する。漱石は自分を小説の道に導いてくれた虚子の為に、「小説家虚子」の支援にまわろうとしたとも推測される。この推測の根拠としては、漱石が朝日新聞に入社以降、多忙の中でも常に虚子の作品に目を通し、実にこまめに小説の批評や、励ましの書簡を送っている事。また、例えば前掲虚子宛て書簡(527)の「只主人公たる君が大奮発するより外に仕方がない」、同じく書簡(552)の「来月は君の独舞台で目ざましい奴を出したまえ」、さらに漱石の朝日新聞入社と時を同じくして虚子も非常に精力的に、しかもほとんど巻頭に作品を掲載していること。そして漱石の、「長い小説の面白い奴」を書いて「朝日新聞へ出しませんか」という誘い(虚子宛書簡911)などが挙げられる。

漱石は三月二五日、大学へ辞表を郵送し、同二八日京都着、学友の狩野亨吉、菅虎雄に迎えられる。三一日、虚子への書簡(808)で「所々をぶらつき候枳穀邸とか申すものを見度候 句仏⁸へ御紹介

を願はれまじくや」と頼む。四月四日、東本願寺の枳穀邸を見学、大谷光演（句仏）に会う「カステラを包んでくれる、カステラ入れる所なし」（日記）。

その後京都に来た虚子と二人で平八茶屋へ行き、夜「一力」に遊ぶ。

やがて発表された「京に着ける夕」は、子規との思い出の京都である。はじめて訪れたあの時、これが京都だと思つた赤いぜんざいの大提灯が今もゆれているのに「―ああ子規は死んで仕舞つた」と思う。「夏蜜柑を食いながら」妓楼の道の真ん中を歩く漱石を見て笑つて居た子規。「しかし死んだものは笑いたくても、（寒さに）震えているものは笑われたくても、相談にならん」と淋しさを呑み込んで、「よもや、漱石が教師をやめて新聞屋にならうとは思わなかつたらう。（略）やつぱり気取つているんだと冷笑するかも知れぬ。子規は冷笑が好きな男であつた」と、子規が人知れず自分に与えてくれる陰徳、その友情に深く思いを馳せる。

また、朝日新聞読者への挨拶をかねた「入社の際」（東京朝日新聞 五月三日）では、「大学では年俸八百円を頂戴していた。子供が多くて、家賃が高くて八百円では到底暮らせない。仕方がないから他に二三軒の学校を駆けあるいて、漸く其日を送つていた」とする。しかしそのあとに「近來の漱石はなにか書かないと生きていない気がしないのである。（略）変り者の余を變り者に適する様な境遇

に置いてくれた朝日新聞の為に、変り者として出来得る限りを尽くすは余の嬉しき義務である」と結んでいる。これを読む限り漱石の大学教師から新聞社への転身の主な理由は、経済的事情と、書かないでは生きて居る気がしないという、自らの激しく動かしがたい、内なる衝動であつた事が推測される。

三 朝日新聞入社以後の漱石と虚子、季子の剣

漱石の明治四〇年四月の朝日新聞入社と時を同じくして、虚子も『ホトトギス』に精力的に執筆をはじめ。すなわち、一月「欠び」、三月「楽屋」、四月「風流懺法」、五月「斑鳩物語」、七月「大内旅館」、八月「同窓会」、九月「雜魚網」、そして同九月の『ホトトギス』（第十卷第十二号）には、小説雑誌、文学雑誌となるは『ホトトギス』の「進歩發達也」と宣言する。

ホト、ギスは文学雑誌として起これり。当時我等同人研鑽せる処のもの主として俳句なりしが故に俳句雑誌たり。其後写生文の新研究起るに及びて半ば俳句雑誌たり。半ば写生文雑誌たり。今や写生文の研究更に歩を進めて小説に及ぶ。今後時に或は小説雑誌たるべし。是文学雑誌としてのホト、ギスの進歩也發達也。而して実に自然の経路也。

このような虚子に漱石はこまごまと気を配り、応援の書簡を送る。

「大内旅館」はあなたが今迄かいたもの、うちで別基軸だと思えます。(略)即ちあなたの作が普通の小説に近くなつたと云ふ意味と、夫から普通の小説として見るとある点に於いて独特の見地(作者側)がある様に見える事でありませぬ。(略)とかく色々な生面を持つて居るといふ事はそれ自身に能力であります。奮励を祈ります。

(明治四〇年七月一六日 虚子宛漱石書簡 879)

長い小説の面白い奴を書いて御覧なさらぬか。さうして朝日新聞へ出しませんか。今度の「同窓会」は駄目ですね。あれは駄目ですよ。あなたを目にするに作家を以てするから無闇にほめませぬ。ほめないのはあなたを尊敬する所以であります。

(明治四〇年八月五日 虚子宛漱石書簡 911)

一二月二三日には漱石の「虚子著『鶏頭』序」が『東京朝日新聞』に掲載され、「余裕のある小説」、「低徊趣味」が評判となる。

「虚子著『鶏頭』序」は、虚子が「ホトトギス」に発表した短編を『鶏頭』として出版するため、漱石に序文を依頼したものである。

序文は原稿用紙で一七枚余の長文であった。

漱石は小説には「余裕のある小説」と、ない小説があるとする。

そして「余裕のない小説」の例としてイプセンをあげ、「人生の死活問題を拉し来つて、切実なる運命の極地を写すのを特色とする」と云う。一方「余裕のある小説」とは、「名の示す如く^{せま}逼らない小説」で、「非常」と云う字を避けた、「普段着の小説である」という。それは、「左から眺めたり右から眺めたりして容易に去り難いと云ふ風な」、「低徊趣味」があらわれるものと云う。虚子の小説は「余裕のある小説」であるとし、「虚子は俳句に於いて長い間苦心した男である。従つて所謂俳味なるものが流露して小説の上にあらわれたのが、一見禅味から来た余裕と一致して、こんな余裕を生じたのかも知れない」と、親しみを込めて解説する。これ以後『ホトトギス』の作者は「余裕派」と呼ばれたりしたが、漱石はどちらも「存在の権利がある」と述べている。『鶏頭』は翌、四一年一月、春陽堂から刊行された。

明治四一年(1908)四月、漱石は『ホトトギス』に、「創作家の態度」、五月には松根東洋城との合作「俳句片々」、七月に「倫敦といふ処」を掲載。三月一九日、虚子宛書簡(1049)には、「近日来の俳諧師大いにふるひ候。敬服の外無之候。益々^{益々}健筆を御揮び可然候」と励まし、また七月には懇切な書簡を送る。

拜復小光はもつとさかんに御書きになつて可然候決して御遠慮被成る間敷候今消えては大勢上不都合に候。(略)ドーデの

サツフォールと云ふ奴を一寸御読みにならん事を希望致し候名作に御座候。俳諧師の著者には大いに参考になるだろうと存候。

盆につき親類より金を借りに参り候。小生から金を借りるもの限り遂に返さぬを法則と致すやに被存甚だ遺憾に候。おれが困ると餓死する許りで人が困るとおれが金を出すばかりかなあと長嘆息を漏らし茲に御返事を認め申候 頓首

(明治四一年七月一日 虚子宛漱石書簡 1081)

小光は、虚子が「国民新聞」に連載中の「俳諧師」に出てくる女義太夫。次の七月四日の書簡と共に、虚子の小説創作の背後に漱石のこのような親身なアドバイスのあったことに驚かされる。

また、後の、自伝的小説とされる『道草』によると、漱石は養父からの養育費や折にふれての親類からの金銭の無心に、たびたび悩まされていることが描かれている。

拜啓又余計な事を申し上げて済みませんが小光入湯の所は少々綿密過ぎてくゞ敷はありませんか。小光をも描かず小光と三蔵との関係も描かず、云はゞ大勢に関係なきものにて只風呂桶に低徊してゐるのではありませんか。さうして其低徊それ自身に於いてあまり面白くない。どうか小光と三蔵と双方に關係ある事で段々發展する様に書いて戴きたい。さうでないとも相撲にならない。妄言多罪

(明治四一年七月四日 虚子宛漱石書簡 1084)

漱石は、九月には『ホトトギス』に談話「正岡子規」を掲載、この年は子規の七回忌であった。そして二月二十六日虚子宛書簡で、「ホトトギスは広く同人の小説を掲載すると同時に大いに同人間の論客を御養成如何にや」とアドバイスしている。

また、十月には虚子の国民新聞入社に伴い、漱石はその文芸欄に次のような評論や談話を寄稿して虚子を支援する。

明治四一年

一〇月二一日 談話「小説中の人名」(国民新聞)

一月七日 評論「田山花袋君に答ふ」(国民新聞)

一月二〇日 談話「新年物と文士」(国民新聞)

明治四二年(1909)、二月五日漱石は「俳諧師」に就いて「を東京毎日新聞に掲載。また前年度に引き続き、虚子が所属する国民新聞に、談話、評論などを精力的に寄稿して虚子を支える。四月五日には虚子に『文学評論』を届けに出掛け、「自分も常に似ず吞んで駄弁を揮う」(日記)とあり、虚子と会って寛ぐ漱石が見える。五月一二日、二人で明治座にいき、同一五日、国民新聞に「明治座の所感を虚子君に問れて」を書く。そしてこの年の秋、九月二日から一〇月一四日まで中村是公の招きで満州、朝鮮に出かける。

明治四二年

一月九日 談話「文士と酒、煙草」(国民新聞)

一月二日 談話「小説に用ふる天然」(国民新聞)

一月三〇日 評論「コンラッドの描きたる自然に就いて」(国民新聞)

五月一五日 評論「明治座の所感を虚子君に問れて」(国民新聞)

五月二一日 談話「メレデイスの計」(国民新聞)

八月六日 談話「テニソンに就いて」(国民新聞)

八月一〇日 談話「文士と八月」(国民新聞)

九月三日 談話「執筆 時間、時季、用具、場所、希望、経験、感想、等」(国民新聞)

一〇月一九日 漱石氏談片「汽車の中―国府津より新橋まで―」(国民新聞)

一〇月二九日 談話「昨日午前の日記」(国民新聞)

十一月九日 「夢の如し」を読む」(国民新聞)

明治四三年(1910) 四四歳の漱石は八月一七日、転地療養先の修善寺温泉菊屋旅館で吐血し、人事不省に陥る。八月二五日には虚子が見舞いに行く。

修善寺にては御見舞をうけ難有候、猶入院中の事とて御礼にもまかり出ず失礼致居候。(略)当節は小説も雑誌もきらひにて、日本書はふるい漢文か詩集のようなもの然らざれば外国の小六

ずかしきものを手に致し候夫がため文海の動静には不案内に候。其方却つてうれしく候。新聞も実は見たくなき気持ちいたし候。(明治四三年一月二一日 虚子宛漱石書簡 1375)

修善寺の大患のこの明治四三年、漱石は久方ぶりに俳句に集中し九九句を残している(坪内稔典編『漱石俳句集』平2・4岩波書店)。「小説も雑誌もきらひにて(略)新聞も実は見たくなき気持ち」という心身の衰弱の中で、心を託すことのできるものは「俳句」という一七文字の世界であり、また、漢詩であった。今も多くの人に愛される漱石の俳句は、このときのものが多い。

別るるや夢一筋の天の川

秋の江に打ち込む杭の響きかな

生きて仰ぐ空の高さよ赤蜻蛉

あるほどの菊抛げ入れよ棺の中

腸はらわたに春滴るや粥の味

同年秋、『ホトトギス』は一宮瀧子の「をんな」を掲載して九月号発売禁止となる。虚子は『ホトトギス』の経営に力を入れるため、国民新聞を退社する。

明治四四年(1911) 一〇月、東京朝日新聞主筆池辺三山が退

社し、朝日新聞文芸欄も廃止となる。漱石も退社を申し出るが、三山の強い慰留で踏み止まる。

虚子は『ホトトギス』一〇月号（第一五巻第一号）「本誌刷新に就いて」で、「主として経済上の理由に基づき、社員組織を解き、原稿料も全廃する」とし、独力で書くことを宣言する。

本紙の盛時に比べると今日残存してゐる読者の数は三分の一に過ぎないのであるが、此の人々に対しては自分は感謝の意を表さねばならぬ理由があると思ふ。如何となれば、自分が俳句本位の雑誌であつた本誌を廣き意味の文学雑誌と改めたといふ事^が一般に非難の理由であつたに拘らず、諸君は自分の志を諒として、或は之を寛^{かん}暇し、若くは暗黙のうちに助力されたものと自分は考へるからである。而も尚ほ子規居士の餘徳や漱石先輩の勢力が諸君と本誌を結び附ける大きな鎖になつてゐることはいふ迄も無いことである。

と、子規と漱石、そして購読者に感謝しつつ、揺れる心を読者に披瀝する。

ここに虚子が残存する読者は盛時の三分の一と記すので、これまでの資料から『ホトトギス』発行部数の推移を抜き出してみると、次のようである。

明治三〇年一月	柳原極堂が松山で創刊	一卷一号	三〇〇部
明治三一年一〇月	東遷（子規・虚子時代）	二巻一号二〇〇〇部	
明治三九年一月	漱石書簡（527）	三〇四〇〇〇部	
同 四月	漱石書簡（552）	五五〇〇部	
盛時（推定）		八〇〇〇部	

（部数は多い時で八千にも及んだといわれる）新潮日本文学アルバム『高浜虚子』

虚子の『子規居士と余』（大4・6日月社）によると、東遷（明治三一年一〇月）後の初版（二巻一号）は、千五百部が売り切れ五百部再版、第二号は千二百部、第三号は千部、第四号以下は千二三百部から千四五百部、であつたという。

明治四五年（大正元年1912）三月、虚子は『ホトトギス』（第一五巻第六号）に、購読者数減少のため「先輩知友にホトトギスの購読を望むの記」を書く。

余は昔は他に向つてホトトギスを購読してくれといふ勇氣が無かつた。（略）今余はホトトギスに全力を注いで居る。自分の全力を注いで居るといふ自信はホトトギスの購読を他に要望し得る勇氣の根源である（略）。

大阪に在る古き俳人の一人は旧年下の如き意味の書を寄せた。ホトトギスは俳句に疎遠になって以来もう暫く読まなかつた。けれども刷新されたと聞いてから又購読することにした。云々。それから余の俳壇に再起すべきことなどが縷々として忠告してあつた。(略)

文筆に携るもの、第一の報酬は自分の文章を人の読んでくれるといふ事である。

次の、四月二一日、東京日日新聞に掲載された漱石の書簡は、日程からみて虚子と『ホトトギス』の窮状を察した漱石が、作家としての虚子を励ますため、『朝鮮』を評価したものと思われる。また五月『ホトトギス』(第一五卷第八号)の「子規庵保存寄付金報告」にも漱石の配慮が感じられる。

拝啓、久しく書物を読まずに居りました処、二三日前あなたから頂戴した『朝鮮』を読む気になりました。只今読みきりました。私も朝鮮へ参りましたが、とてもああは書けません。お京さんといふのが天真楼の何とかいふ女中のやうな気がします。豊隆は平壤の方をくさしたやうに記憶してゐますが怪しからん没分曉漢です。やはり結構です。仕舞の舟遊び楽屋総出で賑やかな事です。私は前後を通じてあなたが(?)お筆といふ女と飯の夫婦になつて帰る処と、夫からそのお筆の手紙とが一番好

きです。

中々うまいです。一寸敬意を表します。頓首。

(四月二一日 東京日日新聞に掲載 四月一八日虚子宛漱石書簡 1622)

五月『ホトトギス』(第一五卷第八号)「子規庵保存寄付金報告 第八回」に掲載。

「二金五十圓也 牛込区早稲田南町 夏目漱石」

同時掲載の他の四名の金額は、各五圓、参圓、貳圓、壹圓で、漱石の五十圓は破格である。子規、虚子に対する漱石の思いが見てとれる。漱石の月収が契約時のままの二百円であるとすると月収の四分の一を寄付した事になる。

そうした中、虚子は同『ホトトギス』(第一五卷第八号)の「消息」で、ようやく俳句に目を向け雑吟の選をやつてみることを予告する。

小生は次号以下雑吟の選を当分遣つて見ることに致し候。近來ホトトギスの俳句愈々不振を極はめ、投句家も各選者も氣乗りのせざる事夥しく、現に本号の如きも一題も選稿に接せざる始末にて、愈々全然廢止するか、其とも小生自身で出来るだけの事を遣つて見るかといふ瀬戸際に立至り候為め、取り敢へず雑吟の選でもと思ひ立ちたる義に候。嘗ては屢々小生自身の口

より俳句廃止の事を提議致し置乍ら、愈、其時が来て見ると多少未練が残り申候。小生としては今は忙余の閑事業、門外漢の片手間仕事たるに過ぎず、到底碌なことは出来まじけれど、他に致方無之、当分の間試み見るべく候。

この文章にある「今は忙余の閑事業、門外漢の片手間仕事たるに過ぎず、到底碌なことは出来まじけれど」は、小説に熱中する虚子の眼中に、俳句がいかに遠いものであるかが窺われる。が、しかし、一五巻一号で『ホトトギス』の刷新を掲げてから半年余、多くの読者の声に応じて、ついに俳句に活路を見出そうとする決意も見え隠れしている。

いま手許にある、東遷後の子規、虚子による最初の発行となった『ホトトギス』第二巻第一号（明治三十一年一〇月）を紐解くと、総頁数六〇、そのうち俳句及び俳句関連の記事が四八頁、つまりおよそ八〇パーセントが俳句であり、その他が子規の「小園の記」、虚子の「浅草寺のくさぐさ」等の写生文となっている。それが明治四五年五月には、俳句は「一題も選稿に接せざる始末にて、愈、全然廃止するか」という状況になってをり、『ホトトギス』がいかに様変わりしてしまったかに驚くのである。

漱石の名が『ホトトギス』にみえるのは、この年の九月号（第一五巻第一二号）「海辺より」に、『レオナルド・ダヴィンチ』の

連載についての、感想書簡が最後となった。

大正二年（1913）一月、虚子は『ホトトギス』（第一六巻第四号）に「高札」を掲げて決意を述べ、三月号（第一六巻第五号）に「暫くぶりの句作」を発表し俳壇に復帰する（二月号休刊）。

高札

一、虚子全力を傾注する事

虚子即ホトトギスと心得居る事

一、號を重ねる毎に改善を試むる事

ゆくゆくは完備せる文學雑誌とする事

一、新年號の外は如何なる事情あるも定價を動かさざる事

漫に定價を動かすは罪惡と心得居る事

一、毎號虚子若くは大家の小説一篇を掲載する事

これは大正二年より新計画の事。大家の原稿を請ふ場

合には乏しき経費のうちより原稿料をしばり出す事

一、写生文壇を率ゐて驀進する事

このうちより専門家、非専門家の文豪を輩出せしむる

事

一、平明にして餘韻ある俳句を鼓吹する事

新傾向句に反対する事

一、「ざし繪」を一藝術品として取扱ふ事

常に新味を追ふ事

これを見るとやはり『ホトトギス』の目指すところは「完備せる文学雑誌」であり、漱石のような「文豪を輩出する」のが大きな目標となつてゐる。しかし辛うじてその目指す文学雑誌の片隅に、平明にして餘韻ある俳句の鼓吹と、「さし繪」を芸術品として取り扱う事という二項目があり、期せずしてそれが「新味」となつてゐる。

大正二年六月一日、漱石は『全集』では最後のものとなる虚子への書簡を送る。

ホト、ギスは漸次御発展の由是亦恭賀小生も何か差上度所存丈はとうから有之候へども身体やら心やら其他色々の事情のためつい故人に疎遠に相成るやうの傾甚だ無申訳四十を越し候と人間も碌な事には出合はずたゞ斯うしたいと思ふのみにて何事もさう出来し事無之耄碌の境地も眼前に相見え情なく候御能へは多分参られる事と存居候万事は其節 勿々頓首

(大正二年六月一日 虚子宛漱石書簡 1861)

漱石は、「身体やら心やら」の事情のため思うに任せない中で、虚子の俳壇復帰以後、購読者の戻りつつある『ホトトギス』の発展を喜び、肩の荷が下りたような安堵が感じられる書簡である。もう

自分が心配することはない、これからは又昔のように共通の趣味である能楽を、そしてもしかしたら俳句も、共に楽しもう、そんな期待が感じられる。

大正四年(1915)三月、虚子がかつて漱石が勧めた東京朝日新聞への小説掲載を実現して、子規の事を伝える『柿二つ』を執筆する。

大正五年(1916)二月九日、漱石は胃潰瘍のため亡くなつた、五〇歳。一二日、葬儀。葬儀委員長は中村是公。

四 『ホトトギス』衰退の真因

以上見てきたように、虚子が、漱石の『猫』の成功でたちまち小説に熱中するところには漱石の強い影響が見られるが、その俳壇復帰の要因となる『ホトトギス』の衰退が漱石の朝日新聞入社が原因とする通説には首肯できない。もともと小説家志望の強かつた虚子が小説に熱中したとき、その小説を常に評価して支えているのが漱石であることは前述の通りである。

漱石と虚子は子規を通して知り合い、さまざまな出会いを重ねてきた。

『漱石氏と私』や『俳句の五十年』によると、漱石が松山中学校から熊本の第五高等学校に赴任する明治二九年四月、偶々帰省してい

た虚子を誘い一等船客で厳島（宮島）に寄り一泊する。（『俳句の五十年』には一〇月とあるが、『漱石研究年表』では四月一四日、第五高等学校教授に赴任している）。

熊本の高等学校に赴任する時分に、漱石がすゝめるまゝに厳島まで一緒の船に乗つて行つたことがありました。その時分に漱石は私に、自分は少し月給を沢山貰ふやうになつたから、若干の金を君にやるから少し勉強をしろといふやうな事をいつた事がありました。（略）月々五円であつたか十円であつたかの金を（略）続けて一年ばかり送つてくれてをつたやうに思いますが、漱石が細君を貰ふやうになつたのを境にしてか、それを辞退しました。（『松山時代の漱石』『俳句の五十年』）

この前年、明治二八年の一二月、虚子は子規から道灌山に呼び出され、後継者となるために勉強する事を強く要請される。しかし子規を重く感じていた虚子はこれを断る。このときの子規の落胆は大きく、「小生が心中は狂乱せり筆頭は混雑せり」ではじまる五百木瓢亭宛の書簡（明治二八年二月一〇日頃）に委しく記されている。この出来事を後日、子規も虚子もそれぞれに漱石に相談をしたと思われ、漱石から子規宛ての、虚子をかばう書簡が残っている。

先日虚子よりも大兄との談判の模様相報じ来り申候。（略）

色々の事情もあるべけれど先ず堪忍して今迄の如く御交際あり度と希望す。小生の身分は固（もとより）何時免職になるか辞職するかからねど出来るだけは虚子の為にせんとて約束したる事なり（略）

小生が余慶な事ながら虚子にかゝる事を申し出たるは虚子が前途の為なるは無論なれど同人の人物が大いに松山のならぬ淡泊なる処、のんきななる処、気のきかぬ処、不器用なる点に有之候 大兄の観察点は如何なるか知らねど先ず普通の人間よりハ好き方なるべく左すれば左程愛想づかしをなさるるにも及ぶまじきか（明治二九年六月八日 子規宛漱石書簡 92）。

と、虚子に好意を寄せている。漱石は元々虚子の人柄を気に入っていたのである。

自らの命の残り時間を自覚して、虚子に後継者として学ぶことを強く迫る子規に対し、虚子の為に学資援助迄して勉強するように論し、結果的に子規と虚子の間をも取りなそうとする、漱石の心遣いが感じられる。このような人柄の漱石に、虚子は何とはなしに甘えているように感じられる。末子が長兄に対するような雰囲気がある。たとえば最初に提示した「（漱石が）「ホトトギス」にも執筆しないことになりましたので、「ホトトギス」の読者が非常に激減しまして、維持が困難になつてきたといふ事の為に」というような書き方にもそれが表れている。しかしこの、虚子本人の言葉、「（漱石が）執筆

しないことになりました。「維持が困難になつて」という点が繰り返され、反復されていくのである。実はその一方で漱石が、虚子が望む「小説家」としての自立と、『ホトトギス』の経営上の安定のために様々な配慮をしていた事実が見落されていることは、これまで見てきた通りである。

『俳句の五十年』は昭和一七年、虚子が俳人として成功してから執筆されたもので、そこには、来し方を振り返る余裕が感じられる一文もある。

もと／＼小説の方に興味を持つてゐたといふこともあり、中頃漱石に刺激されたといふこともあり、一時はその方に熱心の餘り「ホトトギス」誌上に俳句の影が薄くなり、そのため讀者の反感を買ひ、又国民文学欄の創設に携はり「ホトトギス」をお留守にしたといふので益々讀者の同情を失つたのでありました。
〔三二 四年の協道〕『俳句の五十年』

つまり『ホトトギス』の衰退の原因は、ここに虚子が記す通り、又これまで見てきた『ホトトギス』の折々にも見られる通り、俳句雑誌であった『ホトトギス』を、虚子自身の小説志向、漱石の成功などにより、文学雑誌に変更したことにありと思われる。それによつて俳句を学びたい読者には魅力の無いものとなり、そうした購読者を次々に失つたということであろう。しかしそうなったとき、虚子

にとつて最も切実な問題は、成功の時期を特定出来ない「完備する文学雑誌」や、「文豪の輩出」、ということよりも、先ずは『ホトトギス』の購読者を増やす事であったことは、先に紹介した「先輩知友にホトトギスの購読を望むの記」でも明らかである。そして、その確実な方策は、俳句の購読者に応える俳句欄の充実であることに、虚子はようやく気がついたのであろう。

それは即ち、結果として、子規が『俳諧大要』の冒頭で「俳句は文学の一部なり」と高らかに宣言して、人々の心にあかりを灯した、その原点に立ち返ることであつた。この虚子の覚醒と行動とが、『ホトトギス』を、虚子を、そして子規が憂慮した俳句の滅亡をも、救つたということになる。虚子が俳句に対して、漱石のいう隻眼（前掲野村伝四宛漱石書簡 440）を向けることができたとき、自らの道が見えたのであろう。

おわりに

虚子は「平凡化された漱石」（「改造」九卷六号 昭2・6）に「漱石が作家を以て立つやうになつてからの私との関係はどうもその昔ほど無邪気に行かなかつた」と、複雑な感情を匂わせる。そして「私の我儘な心持ちから云つたならばいつまでも漱石は大學の教師であつて、たゞ餘技として文章を書き俳句を作る人でありたかつた。さうして私と共に談笑して二時間も三時間も無用のことを談笑し時

には謠をうたつて時間を空費する人でありたかつた」と述べている。ここにも、あたかも肉親に対するような、漱石に対する虚子の甘えが感じられる。しかし虚子によって俵口を解かれた漱石の才能は、最早無邪気な時間を空費する暇いとまを与えてはくれなかつた。漱石はそのような時機に達していたことを強く自覚していた。虚子にすれば、自らも深く関わって誕生したと自負する作家漱石。そして著名な作家となつて手の届き難い存在となつた漱石。しかし漱石は、盟友子規の忘れ形見のような虚子と『ホトトギス』を、終生真つ直ぐに応援していたのである。そのような漱石と交流を重ねた、掛け替えのない歳月を経て、虚子もついに「進むべき俳句の道」(『ホトトギス』大4・4)に辿り着くのである。

注

(1) 米山保三郎(1869～1897) 金沢生まれ。哲学者。

建築家を志していた漱石に「文学ならば勉強次第で幾百年幾千年の後
に伝へる可き大作も出来る」(談話「落第」)と語り、漱石は工科から
文科に進路を変更した。

『吾輩ハ「猫」デアル』の天然居士のモデルとされる。二九歳で夭折。

(2) 菅虎雄(1864～1943) 久留米生まれ。教育者・書家。

漱石を松山中学に斡旋、第五高等学校に招聘。漱石の帰国後の家探し
に奔走する。

漱石が朝日新聞入社を決め、京都を訪ねた折は狩野とともに京都駅に

出迎える(「京に着ける夕」)。長く第一高等学校の教授を務める。漱
石の墓碑の題字を揮毫し、雑司ヶ谷墓地に今に残る。

(3) 中川元はじめ第五高等学校校長が推挙していることは確かである。貴族
院書記官長をしていた岳父の陰の力もあったかと推定もできる(河盛
好藏)(荒正人・小田切秀雄『増補改訂 漱石研究年表』集英社 昭
59・5)

(4) 狩野亨吉(1865～1942) 秋田県大館生まれ。第一高等学
校校長・京都大学学長。

漱石の推挙で熊本第五高等学校に着任。漱石と小天温泉を訪ねる。帰
国した漱石を第一高等学校の英語科嘱託にする。三九年、京都帝国大
学に文科大学が開設され学長となる。京都学派の基礎を築く。漱石が
朝日新聞入社を決め京都に遊んだ時、下鴨の狩野宅に泊まる。漱石の
葬儀では友人総代として弔辞を読んだ。

(5) 大塚保治(1868～1932) 群馬県南勢多郡生まれ。文学博士、
学士院会員。

漱石とは大学院時代の寄宿舎で同室。ドイツ、フランス、イタリアに
留学、西洋美学を研究して帰国。ケーベルのあとをうけて、東京帝国
大学に日本人教授としてはじめて美学、美術史の講座を担当した。明
治三六年漱石帰国に際し、東京大学英文科講師の職を得たのは、大塚
保治の尽力による。

(6) 鳥居素川(1867～1928) 熊本生まれ。新聞記者、本名赫
雄

独逸協会専門学校中退、新聞『日本』に入り、日清戦争時は従軍記者として活躍した。漱石の『草枕』に感動し、社主に交渉して漱石招聘を發議する。素川は漱石の京都、大阪への常駐を希望したが、結局漱石は池邊三山との交渉で『東京朝日新聞』と契約する。

(7) 池邊三山 (1864~1912) 熊本生まれ。ジャーナリスト、本名吉太郎。

一八歳で上京し、慶應義塾や、同人社に学ぶ。二八年、旧藩主の世子、細川護成の補導役としてヨーロッパに滞在中、新聞『日本』に「巴里通信」(筆名 鉄崑崙) を寄せて文名をあげる。漱石はこれを注目して読んでいた。のち大阪朝日新聞、東京朝日新聞主筆として活躍。漱石は三山に出会ったことで、朝日入社を決意する。以後漱石のよき理解者となる。

(8) 大谷句仏 (1875~1943) 本名光演。東本願寺二三世。枳穀邸は本願寺の別邸、庭園の美で有名。句仏は東京遊学中に正岡子規に傾倒、終生子規と新派俳句の讚仰者となる。

参考文献

『漱石全集 書簡(上・中・下)』第二三卷、二三卷、二四卷 岩波書店 平8・3

『漱石全集月報』(昭和三年版・昭和十年版) 岩波書店 昭37・4

『漱石評論・講演復刻全集 4 明治41年』ゆまに書房 平14・11

『漱石評論・講演復刻全集 5 明治42年』ゆまに書房 平15・11

『定本高濱虚子全集 俳論俳話』第一卷 毎日新聞社 昭49・4

『定本高濱虚子全集 自伝回想』第一三卷 毎日新聞社 昭48・12

『ホトトギス』明治三〇年創刊号~大正七年まで随時

荒正人・小田切秀雄『増補改訂 漱石研究年表』集英社 昭59・5

伊沢元美「虚子の俳壇復帰」『俳句講座7』明治書院 昭34・7

片岡懋「高濱虚子についての一考察—小説から再び俳諧へ」『駒沢短大

国文』第4号 昭48・12

清崎敏郎「虚子の俳壇復帰まで」『俳句』角川書店 昭41・7

小森陽一「漱石を読みなおす」筑摩書房 平7・6

清水貞夫「俳人四明覚書五」現代文藝社 平23・10

谷地快一他「俳句教養講座」第一卷、第二卷、第三卷 角川学芸出版

平21・11

坪内稔典『子規とその時代—坪内稔典コレクション②』沖積舎 平

22・11

出久根達郎「漱石先生の手紙」日本放送出版協会 平13・4

中川四明「明治俳壇の第二期を迎ふ」『懸葵』第六卷第一号 明43・1

牧村健一郎『新聞記者 夏目漱石』平凡社 平17・6

松井利彦「虚子の俳壇復帰と新傾向」『近代俳論史』桜楓社 昭40・8

山崎甲一「『猫』の終焉(中)」『鶴見大学紀要第16号』昭54・2

Background of limitation to write novels for Soseki Natsume and its relationship with “Hototogisu”: Consideration of interaction with Kyoshi Takahama

NEMOTO, Ayako

Soseki wrote "Wagahai-wa Nekodearu (I Am a Cat.)" at Kyoshi's encouragement on "Hototogisu" published in January, 1905. Soseki received publicity for this novel and had succeeded as a novelist. It stimulated Kyoshi to write a novel, and he changed "Hototogyisu" from Haiku magazine to literary magazine. However, the sales of "Hototogyisu" had dropped soon. Soseki was limited to write novels by working for Asahi Shimbun at that time. Generally speaking, this is the reason that the drop in sales of "Hototogyisu".

However, this paper finds out the reason that people learning Haiku stopped subscribing because "Hototogisu" changed to a literary magazine and it didn't interest for them. It is clear by the above analysis that letters written by Soseki, which sent to two people (Kyoshi and Seccho Sakamoto who Soseki taught in the fifth highschool). In addition, this study shows a change of contents in "Hototogisu" since 1897.